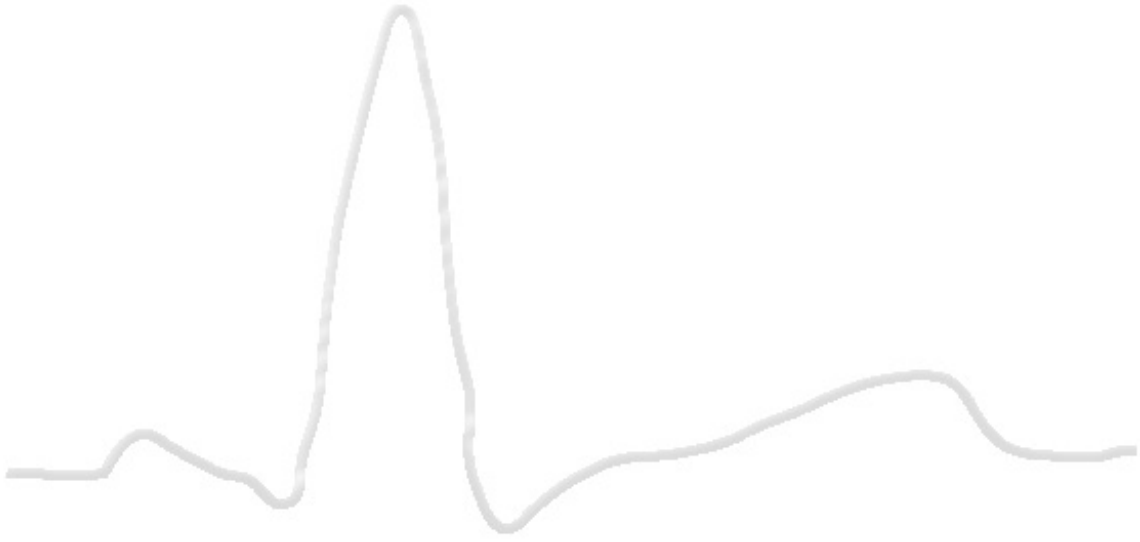


あなたチカク



たっているところ

あしもとはやわららかにここちよい
くうきはたくさんあっておいしい
あついときはぬいで
ごえそうなときは毛布をかぶる
せまいところはかがめばいい
ひろいばしょではトイレをさがす
こんでいたらつぎにこよう
だれもいなかったらまとう

ここはよいところです
だれもじゃましません

むずかしかったらあきらめて
まちがえたらひきかえす
さめていたらあたためなおし
からかったら水をたす
おこらせないように
きたいさせないように
おちないようにくふうして
がまんすればめだたない

だれもじゃましません
うらやましくもありません

自由で楽な世界がここにある
音は出さずに周波数を合わせる
共振が合えば音は消える
ここはなにもないところ
誰の記憶にも残らないところ
消えても誰も知らないところ
たっているところが
幸福な生涯のあるところ

わたしのなかに植えられた
あのコンセント
増えて増えて
部屋中コンセントだらけ
そばへ寄らないで
差し込んだらつながっちゃう
電流が
やめてと言ってるのに
容赦なく流れて
身体が反応する
豆電球がついて
眼電球がついて
電子レンジが回っちゃう
なんにも見えないから
電気つけてよ
スイッチどこだか知ってるでしょ
見たいからそう言ってるの

さあできあがり
吐いたおかずは
におうだろ

入口

たとえばバスタブに湯をためているとき
あるいは
紙の擦れる音
(だからペーパーフォルダーにあるのを捜すの怖いんだ)
そこが淵だとおもう

まず時間がささくれ立つ
音楽の回りが遅くなる
迫りあがるそこ

わざとゆっくり動いてみようとする
チューニングが合わない
座っていたはずの椅子がなくなって
入口にいる
気がついたときには
誰も知らないうちに
渦の遠心力
こうして
あちら側に行ってしまうのだろうか

音がずらしてしまう
動いてもおかしい
入口に佇んでしまったことだけはわかる
怖い
わざとゆっくり動いてみる
利かない
夢のなかで逃げている身体のように
声はこもり動きはおもい
わたしをみる形相が変わっている

疲れてるんだ
お腹がすいてるんだ
だから

後頭部で軋んでいる不快な音が
テープの早回しのようにいとくずを丸め

(ハリガネ、細い)

ゆがんでいる

歪める力がある

歪める装置だ

速さがおかしい

誰か(たぶんわたし。女なことはたしか)の早口な

つぶやきが

その渦へ踏み込ませようと

せきたてる

そこはどこですか

帰れなくても

大丈夫ですか

2004/06

降る人

降ってきた人に
声をかけよう
降ってきた人は
突然だから
降ってきた人に
ぶつかられて
後頭部から
消えない
降る人と
一緒に倒れて
潰れる胸に
空気を送り
あなたの色相が
チカチカするまで
後頭部が鳴りやまない
降っていた人が
あなたでなくても
降ってくる人に
声をかけよう
降る人は
いきなりだから

2005/04

体温計

電池を抜いたのに
たまにまだ鳴る世界時計を
どうしたらいいのだろう

世界の時刻は
いつか必要になるから
捨てられないのだが
（そのときに慌てないためだ）
見えるところに世界はない

世界が大騒ぎしている時刻に
音楽と
電話の呼び出し音
体温も測れ
熱った手足は寝坊したままだ
あまりにしつこいのに
三年は無視している

どこか悪いところを
教えてくれるなら
毎日
体温を測ろう

音楽と
電話の呼び出し音
世界が空前の灯火の時刻に
放熱し
焦る

白線

白線を踏んではいけません
時計回りに順番を待つ三人は
線に合わせて歩く
軌道上の二人が外れたとき
大きく撓んで
ひとりが切れた
四人になった三人は
線に合わせて歩く
バランスを欠いて二人がよろめいたとき
激しく揺れて
手のある方のひとりが切れた
増えた三人は
線に合わせて歩く
遠くなった二人が振り返ったとき
環がずれて
右手が裂けた
細くなる三人は
線に合わせて歩く
比重の軽い二人が油断したとき
流れが澱んで
足だけのひとりが一本になった
歩きにくい三人の
円はひろがる
白線は遠い
ひとりが消えそうな三人は
白線の上を歩きなさい

そんな歯音にきづかなかった
足が痺ってるだけで
産まれる前みたくなってるしかなかった
凍えて握りしめた指を
いっぽんいっぽん
ゆっくり剥がすように
わたしをくるむ胎盤は
体温と同じ温度の
やわらかい酸素のたくさんある液状
はじめて眠った
剥がれてゆくわたしは
ぽきぽきと固いおとをたてながら
ほぐれてとける
とても静かな朝に
わたしはいったん液になって
やわらかな肉体ができた
まだ血管はつながらない
ひとのかたち
(たとえほかのものに、それは奇形であっても)
硬化した管の細い先まで
液が流れるように
硬質の音が消えるまで
産まれないでいてもいいですか
はじめて眠ったから
まだ全部
ほぐれていないのです
液と溶ける
あたたかい

おおきな魚のなかは
きつと蒸しあつい
とおもっていたら
髪のもぜんぶが逆立つ
とつぶうだった
おなかの外は
ひざしが強く
ハリセンボン刺されて
シミが増えた
今日も天気で
どうなるかわからない
おなかはつつぬけで
まえとうしろはみえる
まえはでも
まるくなっていて
まわりはうろこになっている
ハリセンボン刺して
穴をあければ
おおきな魚のおなかは
しゅうしゅうと
ちぢまって
くるまってちっそくする
ゴムに穴をあけてやりたい
そうしたら
しゅうしゅうと
ちぢまって
くるまってちっそくして
おなかのなかからはみだして
わたしはきつと
外にでる
ちっそくしたいのはわたしで
外にでて
いなくなってしまうのが
きつと
うろこにあいた
ハリセンボンあなが

はみでる
そとの世界

2006/06

散歩

なぜ濡れた草の上に座らないのか
なぜ財布を持っているのか
なぜゴミを捨てるのか
なぜ服を脱がないのか
なぜ明日に期待するのか

歩きはじめてすぐ
ひとり置き去りにされたのをおもいだした
あの橋の向こう
行ってみようとおもった
何度振り返ってもいなかった
蒸し暑い日だった
賑やかな街はすぐに現れて
また暗くなった
靄のかかった湿った夜
目的もなく行かれなかった
あの橋の向こう
置き去りにされたわたしまで行くことにした
道はあった
水門の灯りが見える
広く歩きにくい砂利道
灯りのなかの人と目が合ったら怖い
川面は遠い
たったひとりで泣き崩れたあの川べり
何度振り返ってもいなかった
窓は鏡だった
ずっと誰もいなかった
激しい水音に安堵しながら
近づく橋の下の暗がりには先が見えない
あの橋はまだずっと先にある
ひとり置き去りになって
何度振り返ってもいなかった
暗がりを超える
道は歩きやすくなった
わたしはあの橋の向こうまで歩かないだろう
道に誘導される

歩きやすい道は細くなる
なぜ薄い水たまりを踏まないのか
わたしは草むらを歩かないだろう
歩きやすい道に従って
それで水に浮くのだろう
道が分かされると
わたしは歩きやすい道に行く
細くゆっくり曲がる歩く道は
川面に近づき
歩きにくい広い道は
高いところにあった
わたしは濡れる低木の間を抜けるのを避けた
道はまたひとつになる
少しだけ高いところを仰いだ
草むらを横切ればその道を歩けるが
わたしは歩かないだろう
何度振り返ってもいなかった
わたしはあの橋の前で引き返すだろう
わたしの道の突き当たり
わたしは水流を聴きながら
少しだけ草むらを渡り
歩きにくい広い道を帰った
暗い橋の下を走る
濡れた足を気にした
わたしは道を歩く
置き去りにされたわたしは置き去りのまま
何度振り返ってもいなかった
今歩く足音に追いかけられ逃げる
開いている水門
広くなる
明るくなる
靄のかかった川べり
広い道からわたしの歩いた道は見えなかった
川面は遠い
ひとつの低木の間を抜けた
わたしの歩いた広く歩きにくい砂利道
川の向こうはあっちの世界

川の向こうからはあっちの世界
振り返る向きは逆になった
濡れた裾が気になる
川の向こうに誰も渡らない信号がある
赤が消えたとき
わたしは煙草に火をつけた
この信号は
あっち側には届かないだろう

2006/07

全部ひっくり返して
怯えてみたい
かつて一度も
滑らせたことはないのです
想像しただけで
面食らうのです
どこが安全ですか
高くて平らな位置
そこにあるじゃないですか
どうして
飛んでゆくのです
踏み外して
おちてゆくとき見てください
せめて、できることなら
できるはずなのに
つかまる場所があるでしょう
もう
用心しないことはわかりましたから
せめて
怯えさせないでください
退屈なんだろう
しかし支払いと保証を知っている
ひっくり返す前に
怯える

テニスボールの数学者

「穴のあいたドーナツとバウムクーヘンの違い」
を解き明かしている数学者は
あんドーナツにつまづいていた
秋晴れのたかい空
みずいろからだいぶ透明になったところで
塀に投げつけたボールは
アスファルトにバウンドして
ポカポクと数学者の手に還ってくる
水色を飛ばきいろのまるは
ポカポクと規則的に
弧を描いて年輪を刻む
ポカポクは
塀とアスファルトと手のひらを
無意識に移動して
黄いろはかげりなくきれいな水色のなか
数学者は
テニスボールのドーナツが
バウムクーヘンになってゆくのを見た
食べかけのドーナツと
切り分けたバウムクーヘン
テニスボールは
ポカポクと
塀とアスファルトと手のひらで
弧を切られる
夕暮れになる前のくもり空
数学者の投げるボールは
ドーナツにならずに
ポカポクと
塀とアスファルトにこすれる
けばだった黄いろが
灰色になり
同じところに戻っていた
テニスボールは
トツタンと
中心をはずれて
数学者の指先が痛い

くもり空はいつまでも続いた
数学者の手も
テニスボールも
（捨てた毛布のような）はいいろになった
くもり空は塀の色になった
そのままトツタンが
ポカポクになったとき
塀にあながあいて
ドーナツになった
テニスボールは割れて
なかからあんが出てきた

2006/09

むこうから来たひとがとてもきれいだったから
キレイですねと言ったら
気持ち悪がられてキラわれた
だけど忘れられなくて
同じところでまっていた
何日かしてまた会えたから
もう一度キレイですねと言ったのに
またキラわれた
よくあることだけど
もうあんなにキレイなひとには会えないから
何度も何度もおねがいしてみた
僕は風みたいに走れるけど
そういうことはどうも苦手で
少しはきちんとしなくちゃとおもって
一枚だけある
えりのついた白いシャツを着ていった
くびのところとボタンのところがやぶれてるから
テープでとめていた
ちくちくした。やっぱ着にくいなあ
きれいなひとはびっくりして
だけど僕のかおみて笑った
「はっばついていますよ」って
かみのけについたのをとってくれた
ほんとうにきれいなひと
僕はあたまがわるくて、風みたいなところしかじまんでできない
海にむかってる川の近くでたくさん走ってとんでみせた
きれいなひとは目をくるくるさせて
こわそうにみてた
でもだんだんうれしそうになって
それがまた
きれいだったなあ

ひもがとける

さっきのことはもう終わったから
液体になる
靴ひもがゆるくとけて
蛍光灯の廊下をつきあたりまで行く
ほんとうに申し訳ありませんでした
わたしは
いい加減であってはならなくて
わたしは
たまにないがしろになることがあることを
ほんとうに申し訳ありませんでした
ひとはいる
腰のあたりに刃物をもって
振り返ったらわらってる
切りたいですか
すれ違うひとはいる
真っ白い紙を投げ
受け取り拒否には
あかいサインを引いて
手のひらは
癒えない傷みをいつまでも
楽しいですか
握りつぶした紙は
皺でまがっていつまでも
ひとがすれ違った
蛍光灯の廊下はつきあたり
階段のまえで
靴ひもがとけた
戻ってまた
わたしはゆるぎないわたしに
ひもを締めなおし
手の切れる白い紙を
折らずに受けとって
サインされたあの紙を
額に貼りつけて
鼻のまえでペラペラさせて
すれ違う

ゆらげないわたしは
折れた紙に顔だけかくして
嫌になりながら
ひとがいる
つきあたりはいつまでも
突破できない
もうつきあたりだから
とけたひもは
なおさない

2006/10

明けがた

明けがた

さっきテレビで大雨情報が流れていた
今日ようやく布団が干せた
レンジとシンクの掃除はできなかったが
洗濯は三回した
掃除機のごみを捨て忘れた

明けがた

歯を磨いて布団をしいた
窓を閉めて
スタンドのあかりだけで本を開いた
かみなりの音がした
間もなく

雨が降りだした

ひと型に温熱がにじんている

布団で叩きつける轟音は

ぼやけて痺れて

犬に水をやるのを忘れて

何度も謝っていた

明けがた

黙って見つめている犬のかおに

何度も謝って

黙っている犬に

明けがた

大雨の音がした

2006/10

もうすぐくるぶしだから
そのコップを使って
掻きださないと
沈みますよ
ちいさなコップしかないけれど
そのコップは穴がないから
すこしでも
掻きだしましょうよ
かぜは凧いでいて
そらとくもはきれいで楽しいね
あたたかいとおもった
すこしでもいいから
掻きだそうよ
手伝ってくれる？
このちいさなコップはひとつしかないから
かしてあげる
それですこしおおく
掻きだせるよ
もうまん中まで来たかな
なんにもないね
たぶんまだとおいけれど
もう足はつかないよ
だから手伝って
今のうちから
掻きだそうよ
つま先が冷たくて
冬になったらつらいから
今のうちに
掻きだそうよ
ちいさなコップしかなくてごめんね
でもこれで
すこしでも掻きだせるから
沈んじゃうまえに
ぜんぶ
掻きだそうよ
きっとまん中にはだれもいない

もう手の届くところにだれもない
だからそらがあおくて明るいうちに
掻きだそう
ねころがって
ふたりで
たいようをながめて昼寝がしたいな
いまは冷たくて
濡れてしまうけど
いつかそうして
まん中でねころがって手をつないで
そらをながめようよ
したもあおくてきれいだね
キラキラして反射して眩しくて
そのしたは深く深く
くらく
なにもない
すこしだけこわいよ
ほんのすこしだけ
くるぶしにあたる水はとうめいできもちいい
そのしたの深く深く
くらい
なにもない
とてもくるしいは
すこしだけこわいよ
ほんのすこしだけ
くるしいだけかな
むねをおす水はまだとうめいで
そらはきれいできもちいい
耳がすこし痛いけど
ほんのすこしだけ
だいじょうぶ
ああ
ここはまん中なのかな
まだかな
でももう足はつかないね
あおいそらの空気をいっぱいすいこんだ
すこしだけつめたくてきもちいい

水におされた空気が
くるしいよ
ほんのすこしだけ
たいようはまぶしくて
キラキラの反射に溶けて目が
深く深く
くらくなる

2006/12

いまわたしは女なので
明日生きてゆくことを考えている
手帳に書きとめて
計画を練っている
さっき帰ってきた
かなしく本を読むひとは
結局
ちいさな本を
てのひらで
つらいおもいでの写真のように
焦点をあわせられずに
眺め
現実にかえっていった
今日は女であるわたしは
帰ってゆくひとが
帰ってきたものとおもって
こころなしか嬉しくなる
そとに出たばかりの
かえってくるひと
言われるままに本をひろげて
うつむく
かなしく手にとらせたのは
女であるうちは
すこしうれしい

わたしの砂は乾いていた

よく言われる

風化ではなかった

とてもはやく

朽ちてゆく

なぜならわたしは

内側にある水を飲み

まず芯を枯れさせ

わたしをくるむ

ごく薄い

あのビニールのようなものは

雨水をけっして

浸透させないようにできていた

（それはとてもよくできている。自然になじみ、人工的にみえるところはほとんどなかった。
とても丈夫で、伸縮性もあった）

それは乾きをくいとめるためではない

蝕まれないようにするために

わたしはそうして

わたしをまもった

わたしはびょうきになりたくなかった

わたしはでも

なぜマグカップを手放せないのか

トイレばかり近くなるのか

わからなかった

きっと紅茶のせいだろうとおもっていた

わたしはただ

からだをめぐる血を飲んでいて

それで喉がかわいていることを

しらなかった

そしてわたしは

雑菌からわたしを守る

あのビニールのようなごく薄い膜の

穴を塞いでいたことを

しらなかった

わたしの砂は乾いていた

内側から乾いて

そのうちかたちを保っていられなくなって
はらはらと
あのよくできた薄いビニールのなかで
崩れてゆくかたちを
撫でつけてととのえていたが
はらはらと
かたちを失ってゆくことに
ただ焦っていた

(それにしてもあのビニールはよくできていた。かたちも申し分なく、動かなければ、そのかたちを保っていられた)

わたしはだれもない砂浜で
いっしょうけんめい
あなたをつくった
手のひらが擦りきれて
はらはらと
風にのって砂がながれて
静かに打ち寄せる波が
こぼれた砂を
砂浜と同じにした
わたしは大きく手をひろげて
砂浜にひとがたを作り
砂浜とからだのあいだに滑りこむ
海水がわかった
いつかあのビニールに穴があくだろう
わたしはどんなかたちになって
あのビニールを
つまみあげて
かたづけるのだろう

2007/03

あなたチカク

近くにいるあなたの熱が
眠れなくて
あなたは遠い
あなたにいる
触れてもわからない
あなたは近く
この熱が
遠くにいる
見えないときに
あなたはある
近くに来て
眠れない
あなたは声が
忘れられない
遠くはあなた
聞こえる
近づいて見える
あなたは遠い
かたちがはっきりとわかる熱が
あなたにいる
それはわたしの知ってる
遠くのあなた
熱がわかって
眠れない
あかるいまま
近くのあなた
うるさいおとでよく眠り
熱よりも
あなたは近く
足が痺れて
わたしのチカク
目が覚めて
あなたはチカク
熱くて眠れなかった
あなたの近く
痺れてわかる

あなたは近い
わたしは痺れて
あかるいまま
あなたの熱で眠れなかった
わたしは遠い
わたしのチカク
チカクはあなた
あなたはわたしに近づく
近づくわたし
痺れているのはわたし
トオクのわたし

2007/05

でんせんのうえをいたちが
歩いていた
スムーズに
いち列の
みつつの影
あかるめの汗ばむよるは
ひとのかたちは
つくりもの
ひとみたいなかたちの
量産品
違ううごきの
おなじもの
でんせんのうえのいたちは
ほそいでんせんを
おなじ歩幅で
おなじ間かくで
おなじように
なまなますすみ
曲がる
曲がる
曲がる
おなじ感覚で
おなじ影は
なまなま
動いている
あかるめのむし暑いよなか
いたちは
なまなま
いち列に
あるく

だいじょうぶと
うずくまって数をかぞえた
においがする
膝頭で目をおしこんで
むらさきと黄みどりのわがみえる
ごじごじ
タオルでコスッテ
汗をかいてる
においに
イヤにナッテ
まだしびれてふくろがあげられないんだ
ビンにつめる
じょうごがないから
そのまま口をつけた
まだ出る
ふくろがあかないんだ
ぬれてる手で
変なカタチの
ほんをしたじきに
エをかいたりしない
ここでだまって
ふくれたおナカをおさえる
エをかいたりしない
出るから
おぶってあげる
エレベーターが
せまいから